

(様式4)

教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 平成30年 3月 31日

グループ名	小平第十五小学校	フリガナ 代表者氏名	クマイ ヒサノ 熊井 久乃
学校名 (代表者)	小平第十五小学校 (熊井 久乃)	電話番号	042-343-0203
研究テーマ	「親しもう オリンピック・パラリンピック 伸ばそう 自分」		
研究期間	平成 29年 4月 1日 から 平成 30年 3月 31日		
研究結果の概要	<p>1 研究主題</p> <p>「親しもうオリンピック・パラリンピック 伸ばそう自分」</p> <p>2 主題設定の理由</p> <p>平成28年度より都内公立学校において、「オリンピック・パラリンピック教育」が実施され、今年で2年目となった。本校では、平成28年度に「親しもうオリンピック・パラリンピック 伸ばそう自分」という主題を掲げ、生活科・総合的な学習の時間の指導計画を見直してきた。研究のまとめでは、「オリンピック・パラリンピック教育に親しむ事ができた。」「学校として、系統的な学習計画を立てられたことがよかった。」などの成果が挙げられた。一方、「自分が伸びていると感じる姿について、各分科会の捉えが中途半端になっていた。」「自分の生活に活かすところまで見取れなかった。」という課題が挙げられた。また、児童の実態アンケートより、「自分の課題を見付けたりする」ことに対して、苦手意識をもっていることが分かった。</p> <p>以上を踏まえ、平成29年度の研究主題を昨年度と同様の「親しもうオリンピック・パラリンピック 伸ばそう自分」とし、「伸ばそう 自分」に対してさらに追究した研究を展開することとした。また、昨年度は1、3、5年生での研究授業だったことから、今年度は2、4、6年生で研究授業を実施することとした。これは、2年間の研究の成果として、「十五小としての系統的なオリンピック・パラリンピック教育」の指導内容を構築することを意識したものである。</p> <p>3 研究の仮説</p> <p>平成28年度は、「生活科」「総合的な学習の時間」「オリンピック・パラリンピック教育」の関連性について検討し、「自分の課題を見付けたり、解決したりする力」を育むた</p>		

め的手段、見方としてオリンピック・パラリンピック教育を活用するようになってきた。まためには、「生活科や総合的な学習の時間における学びの姿を共通理解することができてよかった」という成果があげられた。一方、「系統立てた評価規準構築のためには、継続した研究が必要である」という課題が残った。

オリンピック・パラリンピック教育においては、「オリンピック・パラリンピックの精神」「スポーツ」「文化」「環境」と「学ぶ」「見る」「する」「支える」を関連させた「4×4の取り組み」を通して5つの資質を養うことが目的とされている。「4×4の取り組み」を網羅することは当然であるが、5つの資質を養うための基礎となるのが、「学ぶ」ことであると考えた。全領域について「学び」を深めていることで、その後の「オリンピック・パラリンピック教育」に対する関心が広まると考えた。

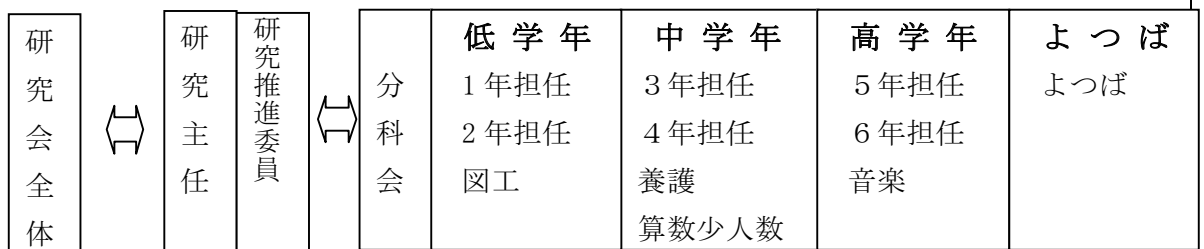
以上を踏まえ、平成29年度の研究仮説を

オリンピック・パラリンピックに関する基礎的な知識を得て、様々な運動や文化に興味をもつことで、自らの課題を見付けたり解決したりする力を身に付けることができるだろう。

とした。そして、この仮説をもとに各分科会の目指す児童像を設定し、研究授業を通して検証していくこととした。

4 研究の内容と方法

(1) 研究組織



(2) 研究の方針

- 授業研究を中心に→①目の前にいる児童を見つめながら、研究主題を追究する。
- ②ベテランの教員も若手教員も授業力を高める。
- ③各分科会で事前授業を行ったり、本時の授業前の授業を参観したりして、授業研究を行っていく。

○年間授業研究日を3回行う→分科会ごとに1回ずつ研究授業をする。

○一人一人が協議会に参加する意識を持つために、各分科会から「授業を見る視点を提案し、その視点ごとに各自付箋に意見を書く。その付箋をもとに協議を進めていく。

(3) 研究年間計画

日程	研究全体会及び授業研究日
4月26日(水)	研究全体会 「昨年度までの研究内容について、今年度の研究の計画について」
5月11日(木)	研究全体会 「研究主題について」
7月5日(水)	研究全体会 「研究の仮説について、目指す児童像について」 講演「オリンピック・パラリンピック教育について」 講師 日本女子体育大学 准教授 須甲 理生 先生
10月18日(水)	研究授業① 第4学年 総合的な学習の時間 「目指せ！パラリンピックマスター！」 講師 東京都教育庁指導部指導企画課 統括指導主事 佐藤 嘉弘 先生
11月1日(水)	研究授業② 第6学年 総合的な学習の時間 「世界とのかけ橋 ～留学生に日本の良さや魅力を伝えよう～」 講師 東京都教育庁指導部指導企画課 統括指導主事 佐藤 嘉弘 先生
12月6日(水)	研究授業③ 第2学年 生活科 「もっとなかよし まちたんけん」 講師 東京都教育庁指導部指導企画課 指導主事 小宮山詠美 先生
2月21日(水)	研究全体会 「今年度の研究のまとめ、来年度の研究について」

4 研究を通じた考察

<「研究授業」に対する考察>

2年目の研究ということもあり、「課題設定」に重点的に取り組むことで、目的意識をもって課題解決に向かう児童が増えた。また、系統的な学習を進めることで、オリンピック・パラリンピックだけでなく地域や日本の文化等に対しても興味を深めることにつながった。

今年度で2年目を終えた校内研究であるが、全学年で作成された生活科・総合的な学習の時間の単元を今後どのように継承していくかについて、検討する必要がある。また、個々の課題が深まった分、解決に要する手立ても多岐に広がったため、今後は課題解決の手立てについて熟慮することが望まれる。

<「手立て」に対する考察>

各分科会が考えた手立ては、それぞれの目指す児童像に迫るために一定の効果を上げることができたと考えられる。また、思考ツールや掲示物等「学びのモデル」を例示することで、個々の児童が課題を解決するための道筋を見付けることができた。

一方、思考ツール利用への義務感や過程の煩雑さから生じる学習意欲の減退が見られたため、今後は利用に関して精選していく必要がある。また、個人の意思決定を深めるために行われる合意形成について、系統的に例示をしていくとよいと考えた。

<「めざす児童像」に対する考察>

めざす児童像は各分科会や研究推進部で検討を重ねた結果、学校として系統的なものとなった。また、それぞれの分科会がめざす児童像に迫ることができたことから、妥当性を感じることもできた。

めざす児童像を達成するためには、2カ年で培った各学年の取り組みについて学んでいくことが大切であるため、共有意識を高めることが必要である。また、「自己の成長」に関する部分に関しては、教師の意図的な働きかけの重要性を感じたため、今後も検討を重ねていく方がよいと考えられる。冬季オリンピックも含め、さらなる関心を深めていく必要性を感じた。

<研究主題に対する考察>

「親しもうオリンピック・パラリンピック 伸ばそう自分」という本校の研究主題に対して、2年間の環境整備や校内研究関連授業の実施により、オリンピックやパラリンピックを身近に感じる事ができた。また、昨年度の反省を生かして「伸ばそう自分」に関する具体的な姿について各分科会で検討を重ねたため、より成果を見取りやすくなった。

しかし、主題に対する定義付けに時間を要しすぎたため、各分科会における有効的な具体的手立てを構築する時間が短くなってしまった。より充実した校内研究にしていくためには、主題自体を事前に狭めていくことも有効的な手段であると考えられた。

その他
特記事
項